

街道

その歴史と役割

シルクロードのように、その昔の交易や物流の代表的な物品の名を冠した道が、日本国内にも少なからず残されています。そのうち、いくつかの街道を取り上げて、その街道が当時の金融や経済に果たした役割や背景についてご紹介します。

絹の道



(きぬのみち)

昨年、米大統領選挙の結果を受けて、今後見逃せないことの一つに、貿易の自由をめぐる動きがあります。その貿易が横浜・長崎・箱館の3港で始

まったのは1859(安政6)年のこと。3港のなかでも江戸に近い横浜の輸出入総額が圧倒的に多く、日本からの輸出品目の第1位は、開港当初から1941(昭和16)年までの長い間、常に生糸でした。

島崎藤村の「夜明け前」には、横浜開港の年、生糸の売り込みに目を付けた中津川の商人ら4人が、横浜までの百里に近い道を馬の背に生糸をのせて、「だれもがまだ容易に信用しようともしない外国人」のなかへ飛び込んでいく様子が描かれています。彼らが持ち込んだ生糸は外国商人を驚かし、百匁金(ももぢご)一両という前代未聞の値が付きました。さらに、この小説には江州、甲州、信州飯田あたりの生糸商人も入り込んで

くる模様だから油断はならないといった開港翌年の威勢のよい様子も織り込まれています。

このように、横浜での生糸の売り込みが盛んに行われたころ、生糸の主要な生産地である上州、信州、甲州などから横浜への生糸輸送で多く使われたのが、甲州街道の宿場町・八王子を経由する約40kmのルートで、「絹の道」、日本版シルクロードとも呼ばれています。八王子は、「桑の都」ともいわれ、養蚕業や織物業が盛んであるばかりでなく、上州、信州、甲州の生糸の集積地でもありました。このため、八王子では、生糸商人が生糸を江戸に運んだり、生産地に向いて生糸を買い集めたりして活躍していました。彼らは、横浜港が開港するや、今度は「絹の道」を通じて横浜に生糸を運び、売込商と呼ばれる日本人の貿易商を通じて居留地の外国商人と取引を行うように

なったのです。

このように、「絹の道」は、開国直後の日本の貿易の発展に大きな役割を果たしました。それだけでなく、「絹の道」は横浜からの輸入ルートとして、西洋の文化を取り入れる役割を果たしたともいわれています。

ただ、一方で「絹の道」がこうした役割を終えるにはそう長い時間がかからなかったことも事実です。1908(明治41)年に八王子と東神奈川間に鉄道(現在の横浜線)が敷設され、生糸の大量輸送が可能になったのです。「絹の道」が活躍した時間の短さに、日本の近代化が急ピッチで進んだことを窺い知ることができるでしょう。

